

なぜ、博物館に研究が必要なのか？

琵琶湖博物館研究のこれまでとこれから

琵琶湖博物館研究顧問

京都精華大学人文学部教授

嘉田由紀子



「博物館は展示をするところ、展示の専門家がいたらいいので、何で大学のように研究が必要なの？」とつい最近も滋賀県内のある方から尋ねられました。「学芸員」という役割に対するイメージも貧困です。「学芸員の本務は研究です」といえば、げげんな顔をする人もいますよ。」

ここでは、琵琶湖博物館の準備室時代から現在まで、約20年にわたる博物館の研究活動を、私自身、博物館と大学の仕事を兼務してきた経験をふまえて、振り返ってみます。そして琵琶湖博物館の研究活動の将来を共に考えてみたいと思います。

エンターテインメントかアカデミズムか？

琵琶湖博物館は1996年(平成8年)に一般公開をしました。が、その10年近く前の1980年代中頃にすでに構想づくりが始まりました。そこで博物館に求められた役割は、目の前で急激に進む琵琶湖総合開発の中で大きく変化する「琵琶湖」の

本来の姿を科学的に深く知り、人間の影響も含めて「湖とともに生きる」ための方策を探ることになりました。1989年の基本構想では「琵琶湖を守ることが自身の生命と生活・文化を守ることである」とたからかにつたわられています。「将来に悔いを残さないよう」ということも強く求められていました。今から考えると「持続的発展」の思想に通じています。

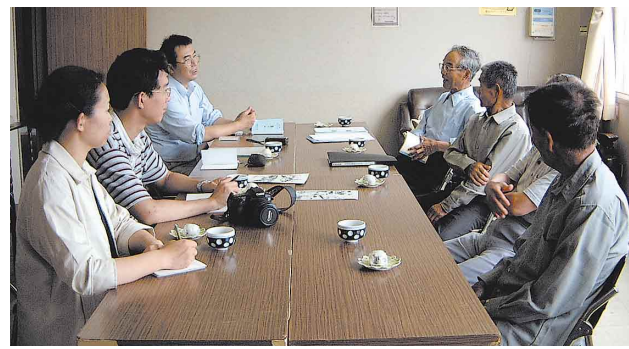
しかし問題はその追求方法です。当時から博物館の性格は「アカデミズム型」か「エンターテインメント型」かという議論がありました。アカデミズムとは「真理」の追求といえるでしょう。エンターテインメントは「楽しさ」の追求です。1990年当時すでに高度な研究能力をもった学芸員が採用され、そこで議論を深めた結果、研究の成果を柱にすえながら、展示や交流活動に「楽しさ」「おもしろさ」「刺激性」を求めることは

可能ではないか、という結論に達しました。つまり、アカデミズム型でもあり、エンターテインメントも求めるというものでした。このような考え方は、それまでの博物館づくりではあまり先例のない方向でした。

常設展示は研究者と住民の熱い思いの表現

そのためには、人びとが何を「楽しい」「おもしろい」と感じるのか、それは研究者の論理や思考方法とどう異なるのか、深い洞察が必要です。

そこで、学芸員同士で徹底的に議論したのは、それぞれの専門分野の中で研究者としておもしろいことは何か、そのおもしろさを一般の人たちに伝えるためにはどのような研究資料を元にどのような表現が可能であるのか、ということでした。人びとは自分に深くかわり直接的に自分が知っていることに深い関心をもつのではないか。しかし



琵琶湖博物館学芸員による聞き取り調査の様子

遠い時代や知らない世界にもロマンを感じる。それゆえ「近さ」と共に「遠さ」も求めました。

また一方的な伝達以上に、地域の人びとと共に考え共に成長していけるような「参加性」「対話性」にも楽しみを感じるだろう。そして、本物の博物館は琵琶湖とその周辺の自然と暮らしてあり、博物館はそ

の本物の現場への入り口ではない、という「フィールドへの誘い」という思想も求めました。

琵琶湖博物館の展示のほとんどがオリジナルであるのは、専門分野の研究者の研究テーマへの深い洞察と思い入れを背景に、博物館活動に地元住民の立場から深くかわわつてくれた人びとがおられたから、と今から解釈することができません。共に熱い思いをもって、人びとへの伝達舞台としての展示を工夫してきたからともいえるでしょう。

博物館活動をリンゴの木にたとえてみると

その後の博物館活動全体の中で、研究がどのような位置づけにあるのか、わかりやすく示そうとしたのが、博物館活動樹木図です(図1)。博物館活動を樹木、具体的にここではリンゴの木にたとえ、研究・調査活動は、大地に深く食い込み「知」という水分と栄養分を汲み上げる根に相当すると考えています。研究活動がなければまさに「根なし木」になってしまいます。

一般に数からみて多くの人びとが関心をもつのは果実であるリンゴでしょう。図1ではリンゴの実を収穫する場面として常設展示や企画展示を示

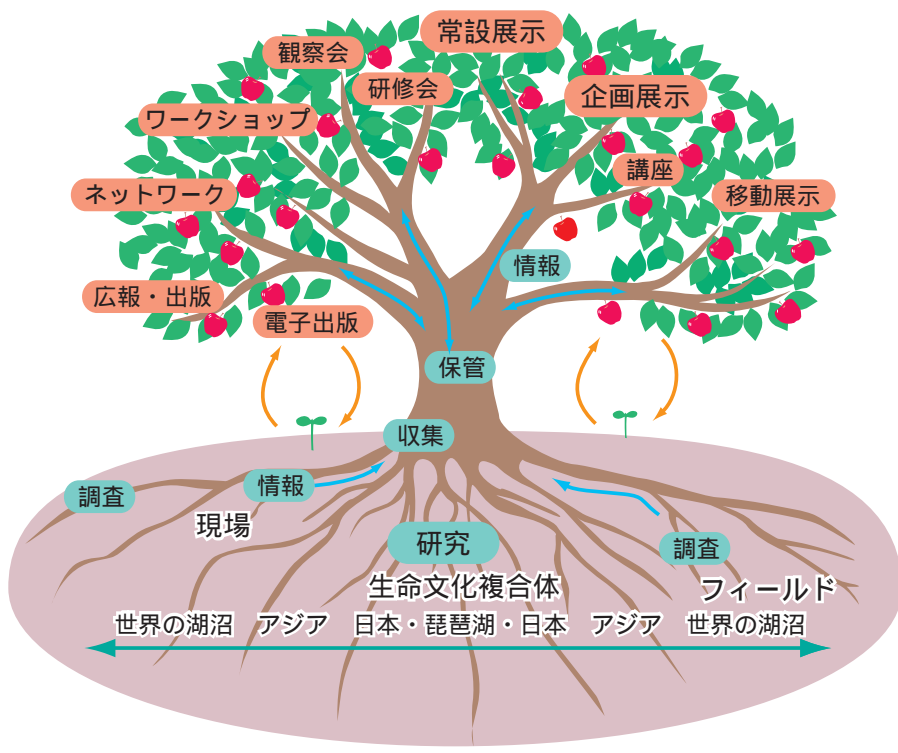


図1 リンゴの木にたとえられる琵琶湖博物館活動

してあります。研究活動という根があるゆえにみずみずしくおいしい、また個性的な味をもつリンゴを育てることができるのです。

借り物の研究成果ではオリジナルな展示はできません。前に常設展示のところで述べた通りです。開館後は、毎年定例となった企画展示やギャラリー展示を行ってきました。そのいずれもが、専門分野をもった学芸員

と地域の人たちがともに作り上げてきたオリジナルな研究情報に基づき構成されてきました。

同時に観察会や研修会、講座などの交流活動や、出版物もリンゴの実で表現しました。借り物の交流活動では、博物館に人びとは集まりません。ましてさまざまな情報がインターネットなどで容易に入手できる今のような時代である

からこそ、人びとは本物の資料、本物の研究活動、そして何よりも本物の研究者を求めます。つまり、博物館における交流活動や情報表現も調査研究という栄養が補給されるからこそ、味わい深いリンゴとなるのです。その研究活動は地域とともにあります。それゆえリンゴの木の下には多くの地域の人たちの共同研究や対話的な双方向の交流活動があります。

現在、琵琶湖博物館には、はしかけさんやフィールドレポーターなど300名以上の人が交流活動に参加しており、その中には、学芸員と共同の学術論文を発表した人もいます。今後、超高齢化社会にむかい、自己実現と社会参加を求めてより多くの地域住民の方がたが、博物館への積極的関わりを求めてくるでしょう。学芸員の研究能力の向上はますます重要となってきます。

今、琵琶湖博物館に求められる研究

開館後10年近くを経て、今後の琵琶湖博物館の方向を定めるため、博物館の中期構想が2005年3月にまとめられました。ここでは「地域だれでも・どこでも博物館」という目標にむけて、研究部

門の機能としては「地域の人びととともに、学際的、国際的な視野をもって「湖と人間」のテーマに沿った研究・調査を推進し、その成果をわかりやすく発信する」としました。

今、残念ながら琵琶湖の自然は1990年代に予想した以上の危機状況にあります。古代湖として多くの在来種や固有種を育ててきた琵琶湖から、その姿が消えつつあり、外来種の湖とさえなるうとしております。このような時代だからこそ、数百万年の琵琶湖の自然史の中で育まれてきた固有種の生成と維持のプロセスを科学的に解明し、その種や生態系の保全に対する基礎的データが求められています。これは琵琶湖博物館ならではの基礎研究といえるでしょう。

同時に、琵琶湖の危機の原因のほとんどは人間の生産・生活活動にあります。人間の生産・生活活動がその周囲の自然の仕組みとどのように関わっているのか、そのメカニズムを数百年から数十年という時間軸の中で学際的に明らかにすることも現在の重要な研究テーマです。特に河川や水田など、生き物と人びとの暮らしが深くかかわっている舞台での相互作用の仕組みを解明することで、暮らしと自然の将来のありかたを模索

する提言を社会的に、場合によっては代替的な公共事業など、政策として示すことができるでしょう。

一方、今、大きく地球規模ですすむグローバル化の中で、足下の地域社会や地域文化の基盤もゆらいでいます。自然の荒廃とやらんで、人びとの「精神の荒廃」も進んでいます。ローカルな風土と文化の価値を再発見し、その再生を促すような人文的な研究も必要となっています。

ここでは、方法として、国際的視野の中での比較文化的な研究も意外と有効かもしれません。持続的な自然は、持続的な地域社会と、持続的な文化とともにまると守られていくものでしょう。

いずれの研究活動においても、専門家としての透徹した論理性に裏付けされ、同時に人びととの交流の中で新たな想像力を身につけ、実践的な創造に結びつけていけるような学芸員の存在こそが、博物館に求められる社会的貢献の柱となるでしょう。

参考

- 川那部浩哉。博物館を楽しむ 琵琶湖博物館ものがたり。岩波書店、2000年。
- 嘉田由紀子。水辺暮らしの環境学 琵琶湖と世界の湖から。昭和堂、2001年。
- 布谷知夫。博物館の理念と運営。雄山閣、2005年。